

シリーズ

不登校急増

どうする！ストレスの多い「学校教育」

2021年度の文科省調査で、全国の不登校児童生徒の数が、24万人と発表されました。

20年度より25%（約4・9万人）の増加で、過去最高です（グラフ参照）。富山県では、初めて2千人を超え、初めてという状況が発表されています。子どもは、どの実数は、どんどん減っているのに不登校児童の実数が多くなっており、とりわけ、中学生は5%占め、ほぼ1クラスに2人の割合で不登校の生徒がいることとなります。

不登校の小中学生（全国）



思いをさせて！この子らに

身体の不調や「学校へ行きたくない」という子どもの訴えがあったときに、保護者は初めて子どもの訴えや様子に驚きます。でも、子どもの方は、長い間ストレスに耐え、我慢を重ねたあげくなので、「学校へ行く」選択肢はもうない状態で訴えているのです。保護者の戸惑いと、窮地に追い込まれた子どもの状態に思いをさせてみて欲しいものです。

子ども一人ひとりと、その両親や祖父母、兄弟姉妹の驚きや戸惑い、悲しみや、先の見えない苦しみがあることに、文科省は心を寄せて言えるのでしょうか？ そして、学校へ「行きたい」のに「行けない」自分への情け無さや、家族への申し訳なきに、また自分を否定しなければならぬ子どもたち、どう「教育を受ける権利」を保障しようとしているのでしょうか？ 「不登校は24万人です」と調査発表することで、国の仕事は終わっているのではないのでしょうか？

これで良いのか、今の学校教育

もう、「学校教育」の内容や体制そのものの検討に視点を向けなければ、多くの子どもたちとその家族が、苦しみ続けることになり、その数が益々増えていくことになる予想されます。

教職員組合や保護者、婦人団体、地域のみなさんは、ずっと少人数学級を言い続け、40年もかけてやっと35人学級を実現しました。現実の子どもたちは、発達障がい、LD（全般的な知的発達に遅れはないが、読み、書き、計算などの一部で能力に困難がある）、貧困

お金と人手をかけて

30人以下学級を
一クラスの学級定員を30人以下にするだけでも、多くの子ども達を取り巻く問題、(いじめ、不登校、学力低下など)は、おむね改善できます。お金と人手を一人ひとりの子どもたちや保護者にかければ、こんな悲惨な状況は生まれません。すぐできることの一つには、早期に少人数学級を実現することです。



居場所を、家庭や学校以外にも

文科相自身が、不登校の児童・生徒に学校への登校を促したり無理強いしたりすることはやめようと呼びかけています。であるなら、家庭や学校以外の居場所を多様に子どもたちに、保護者に、提供することが求められます。この点では、民間のフリースクールの施設やNPO法人が、大きな成果をあげつつあり、こうしたところにあるアクセスしやすい情報提供が、緊急に求められます。(つづく)

もっという 学校に行きづらい子

その上、この24万人の数は、1年間で30日以上学校へ足を踏み入れていない児童生徒の数で、週や月単位で2、3日でも顔を見せた、放課後登校や保健室登校している、1日2、3時間だけいる、あるいは市町村単位の適応指導教室、学校以外の民間のフリースクールに行っている子どもは数に入っていない。学校に行きづらい「子どもは、実際にはもっともっと多くいることとなります。

自由なふんいきの居場所を、近くに

10月の決算特別委員会でY委員の質問に、教育総務課長は21年度の不登校の人数は、小学校で17名、中学校では14名であったと明らかにしました。そのうち教育センター(旧岩尾滝小学校)の適応指導教室「フレンド」に通ったのは7名で、そのうち1名は中学校へ復帰したそうです。保護者からは、教育センターに通うのは大変だとの声

川柳・狂歌
大企業太り庶民は痩せ細り
瀬戸際に追い詰められてやっと辞め
それに懲りずに本部長とは
荒川翔平